
ハケ代あやねの幸福論

うみの えび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

八ヶ代あやねの幸福論

【Nコード】

N0552Z

【作者名】

うみの えび

【あらすじ】

つい考えすぎてしまう女子高生と、明朗快活な男子の恋愛の話。

「そう、悪い意味じゃないの……」萌絵は軽く微笑んで答えた。「先生、素朴と単純って、どこが違うのかしら？」

「現象としては同じだ。まあ、違いといえば、観測者の先入観かな」犀川の返答に、萌絵は吹き出した。

笑わない数学者

/ 森 博嗣

身体が熱くて、どうしようもない。
顔は火照っていて、呼吸も荒くて、どくどくと血液の流れる音が耳に障る。

いつからだろう。

あたしは優しく包まれていた。

今はもう、なにも考えられない。……このまま目を閉じて、眠ってしまいたい。

そう思っていたときだった。

「——はい、三十七度八分。立派な風邪です。だれか迎えに来てもらえる人はいる？」

「……お母さんが」

あたしが声を振り絞って答えると、

「じゃあ連絡しておくから、今日はもう家で安静にね」

「……あい」

はい、と言ったつもりが口が回らず、あたしはそのまま、クラクラした頭で笑顔と白衣の眩しい保健の先生の姿を見る。

白いシーツが気持ちよかった。朝のホームルーム中にダウンしたあたしは、まっすぐ保健室に運ばれてベッドで寝かされていたのだ。季節の変わり目はいつも体調を崩してしまう。高校生になったばかりでまだ新しい環境に慣れていないのもあるせいか、今回の風邪はいつもよりきつい。

先生は保健室から出て行ってしまった。親への連絡と、あたしの荷物を取りに行ってくれたのだ。

あたしは身体を揺すって横向きになると、意識的に自分の重さを布団に預けてみる。

身体は、沈み込んでいくはずだ。

……だけど、こうすると浮いているような感覚になる。

「うぐ……」

なんだか、こんなとりとめのないことばかり考えてしまう。体調が悪いといつもこうで、まあ、こんな状態は嫌いじゃないのだけれど。

あたしが暫くぼーっとしていると、

「ハケ代さん、大丈夫？」

先生と一緒に帰ってきた男子が、軽い調子で話しかけてきた。

「俺のことわかる？ 本郷寺。ハケ代さんの手伝いに来たんだけど」

「うん……ごめん」

あたしは頭痛を我慢しながら身体を起こす。

（本郷寺君か……）

話したことはないけれど、この人は遊び人っぽくてちょっぴり苦手なタイプだ。

「わ、なんか不謹慎なこと言うけど、ハケ代さんからなんかまじ良い匂いする。なんか色っぽい」

なんか言ってるけど、それはあたしの眉間にしわを刻む効果しかない。

こっちはキツくて反応してらんないんだから、放っておいてくれるのが一番だ。

……とはいうものの、良い匂いっていうのはちょっと嬉しいかも知れない。

保健の先生はあたしのカバンをベッドに置いて、

「親御さんすぐ来るみたいだから、正門で待ってましようか。本郷寺君と一緒にしてくれるらしいわよ。お大事にね」

そして、

「じゃ、カバンは俺が持つよ。歩ける？」

本郷寺君（下の名前は知らない）の背は高い方で、髪はワックスでツンツン立っている。やんちゃ系の女子グループに人気がありそうな顔立ちで、顎が細い感じのかっこいい人だ。

あたしは彼にお礼を言うと、カバンを持ってもらって正門へと向かった。

靴を履いて、昇降口から出る。

本郷寺君はあたしのカバンを片手にぶら下げて隣を歩いてくれている。

見た目の印象とは裏腹に、彼は保健室を出てからはずっと何も喋らずに静かにしている。

それが少し意外で、逆に彼のことが気になった。

気になったとは言っても好きとかそういうのじゃなく、単純に彼に抱いていた軟派なイメージが変わったというだけのことだ。

あたしは病人さながらの様子でクラクラと歩きつつ、その気持ちを整理する。

本郷寺君は優しい。

だけど、やっぱり恋愛対象としてはピンとこない。

……あたしは、どんな人が好きなんだろう。

(彼氏がいるって、どんな感じがな……)

もし今、彼氏がいたとしたら、病気のあたしを助けてくれるだろうか。

もし……本郷寺君が彼氏だったとしたら。

あたしは彼に、やっぱり甘えてしまうのか……。

「……やば」

考えが変な方向にいつてしまった。

本郷寺君に甘える自分を想像して変な気分になりかけたけれど、甘えるって行為には惹かれるものがある。

——こうやって、冷や汗をかきながら歩いていればいるほど。

誰かにこの身体を預けられたらどんなにいいだろう……と思う。そして、それはきつと幸せなことなのだ。

「ハケ代さんって彼氏いるの？」

う、突然。

「いない……かな」

正門を前にしたくらいのときに話しかけられて、あたしは答える。すると彼は興が乗ったように、

「へえ、じゃあ今まで何人と付き合ったことある？」

こつちを向いて話しかけてくる本郷寺君を横目で見て、あたしは次に目を閉じて言う。

「ない」

「ないってなにが？」

「付き合ったことないの」

「えっ？」

えっ？と言う彼をよそに、あたしは正門の門柱にもたれかかる。頭をつけようとしたら勢いあまって軽く打った。痛い。

「ハケ代さん、付き合ったことないの？」

本郷寺君は目を丸くする。

それもそのはずで、もう高校生にもなるというのに付き合ったことがないっていうのはそろそろヤバいと自分でも思う。付き合ったことがないというのがプラスになるのは中学の初めくらいまでで、あとはどんどん売れ残りとして年月を重ねていくだけ。時間が経てば経つほど手を伸ばされなくなって、最後には見向きもされなくなる。

いまだ彼氏なしというのは、つまり、その危険性を孕んでいる人なのだ。

そして悲しいかな、もちろんあたしもその中の一人なわけ。

「っていうか、ハケ代さんって綺麗だよな」

そう言ってくる彼に、

「本郷寺君はいっぱい付き合ってきてそうだね。どれくらい？」

あたしは頭痛に眉を顰めて、目を瞑ったまま言う。

——正門に、二人きりの状態。

あたしが本郷寺君からの返答を待っていたとき、大通りの歩道を

歩いてきたおばさんが急に彼に話しかけてきた。

「あら、やだわあ。あんた、彼女の介抱してあげてるの？」

「あ、はい。彼女です」

おばさんはにこやかに、

「まあ憎らしい。でも優しいのねえ。えらいわあ」

「いやいや、そんな。キツそうだったんで」

二人で楽しく会話したあと、おばさんはあたしにもお大事にと言
って去っていった。

あたしは今までとは違う意味で頭にきていた。

(……彼女です?)

勝手になにを言うんだろう。

そんなの決めないで欲しいし、それはどどういう意味なんだ。

「つてか、ハケ代さんって彼氏作らないの？」

作らないんじゃないかって作れないのだと言いたい。

ほんと、頭痛い。

「俺、こっちにいていい？」

ちゃっかり横に立ってきた彼を若干無視しながら、あたしはなに
も言わずそのまま門柱によりかかったままでいた。体調がすこぶる
悪くなってきた、動きたくても動けない。

「本郷寺君、授業大丈夫？」

今はもう一時限目が始まっているころだからと、あたしは彼を見
ずに訊いた。

「ああ俺、自分から手伝いにきてるから大丈夫。最初から気にして
ないよ」

と言う彼にあたしは顔を向けて、

「なんで？」

そう訊くと、

「なんでって……ねえ？」

口元がほころぶのを繕うようにしながら本郷寺君は言う。

「理由言っていいの？」

「言えばいいじゃん」

と言うと、彼はその顔をこっちに向けてあたしの目を見つめた。
今からなにを……、

「だって俺、ハケ代さんが好——」

「夕陽高っ！ こ、ん、に、ち、わあー！ くう、やっときたか俺
ー！ よっしゃー！」

……やたら元気いっぱいに叫びながら、男子が一人学校にやってきた。

——両手をいっぱい広げて、ハツとするような可愛い笑顔。

そうやって全身で喜びを表現している彼に、あたしの意識は一気に全部持っていかれてしまった。

「……あ、」

彼はこちらに気付いたようだ。

そして、あたしと本郷寺君に見つめられたまま半笑いになって、

「あ、こ、こっ、こんにちは」

と、頭に手を当ててぺこぺこと頭を下げはじめた。

「こんにちは」

あたしも頭を下げる。

彼はまさかここに人がいるとは思っていなかったらしく、恥ずかしそうにそそくさと校舎の方へ退散していった。そうなる気持ちは痛いほど良く分かる。

あたしが思わず彼の後姿を見送っていると、

「聞こえた？」

「へ？」

「俺が言ったこと」

本郷寺君が、さっきの告白は伝わったかどうかを確かめてきた。

とそこに、一台の軽自動車が止まった。緑色のミニカーみたいな可愛いやつで、これはホンダのコペンっていうやつらしい。車に興味のないあたしがこれを知っている理由は簡単。

「あ。これ、うちの車。本郷寺君わざわざごめんねっ。ありがとう」

そう言っであたしが差し出した手に、本郷寺君はカバンを渡してくれた。

本郷寺君はカバンを持っていた手を振って、

「それじゃまたね」

「うん、ばいばい」

あたしは助手席に乗り込んで、カバンを前に抱える。

「なにあやね、あの子彼氏なの？」

「じょーだん」

隣の運転席からのお母さんの声に、あたしはばかばかしく答える。

お母さんはクスッと笑って、

「なんだか元気そうじゃない。先生、相当体調が悪そうだって言うんだけど？」

「ん……」

あたしは車に揺られながら、自分の体調を意識してみる。そして、

「……お母さん」

「なあに？」

「あたし、今まですごくマイナスだったんだけど、今は差し引きゼロみたい」

言うあたしに、お母さんはハンドルを切りながら、微笑ましげに、

「なんかいいことあったの？」

あたしは、さっきの鮮烈な印象の男子の姿を思い出す。

なんというか、あのポーズはパーフェクトだった。

「うーん……」

あたしはなんだか可笑しくて、そして何故か嬉しくなってくる気がした。

もしかしたら、あの人の明るいエネルギーがこっちに伝播してきたのかも知れない。

頭の痛みは、いつの間にか消えていた。

「イワンティノー？」

あの元気な彼はそう呼ばれてるらしい。ロシアとイタリアの名前が混じっているのはどうしてなんだろう。

「うん。多分イワンティノーって人で間違いないよ」

教えてくれたのは友達のみきちゃん、みきちゃんはおも続け、

「やつちゃんが早退した後で学校に来た人って、隣のクラスのその人しかないと思う」

「ふうん？　ありがとう」

ちなみにあたしは、高校に入ってからはやつちゃんと呼ばれるようになった。うになっていた。

中学の頃のあだ名はあやちゃん、その頃からなじみの友達は今でもあやちゃんとあたしを呼んでくる。中学の頃は名前があだ名の元で、高校生になって苗字の方が使われるようになった理由は風に吹かれている。

今は朝のホームルーム前。

あたしは熱が引いて二日ぶりに登校して、みきちゃんにあの底抜けの笑顔の人のことを訊いてみていた。実のところ、あの男子の笑顔とポーズの素晴らしさについて話したかったから話題にしてみた。ただだったのだけれど。

世界中の全てを抱きしめるような、あの姿（大袈裟）。

まるで整理された計算式のように簡潔で、とても純粋なもののように見えた。

しかもどこか芸術的で、ポートレートにして額縁にでもいれておくべきかのような……ってあたしはなにを考えてるんだろうか。少し褒めすぎているような気がして、自分でちよっと笑ってしまう。

——でも、やっぱり彼の笑顔を思い出すとなんだか幸せな気持ち

になつてくる。

「イワンティノ君ってさ、良い人そうだよね」

あたしが言うと、みきちゃんは吹き出して、

「それがその日の昼休みにね、イワンティノ君校庭の樹に激突したらしいよ？　あたしもその事件であの男子のこと覚えててさ。サッカーしてたのかな。とにかく、わんぱくだよね」

「わんぱく？」

わんぱく、か……。

それって言い得た表現だなあなんて思っていると、

「それよりもさ、本郷寺君とはなにかあった？」

「ん？」

……。あ。そういえば本郷寺君にまだお礼を言っていない。

あたしはそう思いつつ、

「なにもなかったけど」

ごまかしつつ、今日のうちに本郷寺君にお礼を言っておくことを頭に入れた。

そんなあたしに、みきちゃんは少し呆れた風情で、

「やつちゃんってさあ、どんな人が好きなの？」

「うー。あたしは好きなタイプっていうか、自分を知ってて、それでいて自分らしく生きてる人が好き」

「何系が好きとかは？」

「そこら辺って周期的に変わらない？　真面目な人が良いって思うときもあるし、面白い人が良いって思うときもあるし。結局どんな人でもさ、自分をちゃんと生かせる人が魅力的で、あたしはそんなのが好きかも」

「あーそれわかる！　そういう人ってさ、うまく言えないけど輝いてるもんね」

みきちゃんが解ってくれているからあたしは嬉しくなって、

「自分の要素のバランスが取れてる人って良いよね。自分らしさが純粹だから、安定してるっていうか」

「うーん、よくわかんない」

そう言って口を結ぶみきちゃん。

「輝いて見えるっていうのは、つまりそういうことだよ」

あたしがそうまとめてみると、みきちゃんはあたしをしげしげと見やって、

「やつちゃんってさ、ちょっと変わってない？ 悪い意味じゃなくてね、なんだか、理系ってゆーの？ 変な単語も言うもんね」

だとしたらそれは多分お父さんの影響で、子供の頃のあたしもお父さんに対しては同じような印象を持っていた。どうやらあたしも感化されてきているらしいけれど、お父さんは尊敬できる人だからとくに気にしない。

それよりも、と、あたしはさっきの自分の発言を反芻してみる。

イワンテイーノ君があれだけ輝いて見えたのは多分、彼が純物質みたいにはつきりとした要素を持っている人だと感じたからだ。いるんな要素がせめぎあっている人は混合物みたいに中身のバランスが重要だけど、彼の場合は常に性質が一定で……。

そう。その人は自分の振る舞いを周囲に左右されない。いつもどこでも自分らしさを保てる人なのだ。

純粋な単体の、まるでダイヤや金みたいで、ひよつとするとイワンテイーノ君もそんな人なんじゃないだろうか。

——そんなことを考えているあいだにホームルームも終わって、一時限が始まった。

二時限目は書道。

書道室へ女子三人で移動しているとき、

「あ、本郷寺君。この前はありがとう。ごめんね?」

あたしは廊下ですれ違った本郷寺君に話しかけた。

「あーいいよ全然。その書道用具も持つところか?」

彼はなんだかぬぼーとした人だと思う。

あたしは書道用具を持った手を思わず振ろうとしながら、

「あ、いや、本郷寺君は今から教室に戻るんでしょ? あたしたちもう先に行くから」

「まあ言ってみただけ。じゃあね。風邪引くなよ」

立ち去る彼をあたしたち三人は目で追う。

そのうちの一人、

「……やっちゃんさ、本当に本郷寺君となにもなかった?」

みきちちゃんが唐突にあたしに言ってきた。それを妙に気にしているのは本郷寺君が女子に人気があるからで、みきちちゃんもその例に漏れず、

「えー。なんでなにも起こさないの? 起こしちゃえばいいのに」
そんなことを言う。あたしは起こしちゃわない。

「えー?」

「えーじゃなくて、あたしはそんな気ないもん」

みきちちゃんとあたしがそんなやりとりをしていると、

「でも、あっちはその気じゃん? 付き合っちゃえばいいでしょ」

三人のうちのもう一人、ゆっこがサバサバと言った。

「そうそう。やっちゃんエロいんだし、何事も経験だつて」

みきちちゃんと仲良くなったきっかけというのが下ネタ話で盛り上がったからだというのは墓場に持っていく話として、ちなみにゆっこは中学からの友人だ。高校に入ってから、あたしたちは基本同じ

クラスのこの三人で過ごすようになっていく。

「経験つて言われても……」

あたしは脱力して、大きな汗の記号を頭に貼り付ける。

「でもあやちゃん、本郷寺君って良いんじゃない？ パツと見は遊んでそうだけど、優しい人って感じるしさ」

ゆっこから言われて、あたしはゆっこを見つめる。

確かにそうかもしれない。本郷寺君はやっぱ良い人なんだろうけど……。

「もしかしてやつちゃん、他に好きな人がいたりとか？」

みきちゃんからそう言われて、あたしは思い当たるフシを検索する。

そしてすぐ、そうすること自体あたしには好きな人がいないっていう意味なんじゃないかと思ったものの、

「……現社の先生は好きかも」

「現社って、田宮先生？」

ゆっこが言う。

「あの人って若いけど、ちょっと変わり者じゃない？ でも授業はあやちゃんが好きそうな感じだよな」

「うん。面白いと思う」

田宮先生は知識の深さと広さが心地良くて、おおらかさというか大きなキャパシティがある。あたしのお父さんとは別種の肌の人で、お父さんはどちらかというと一点に凝縮することで知識の適用範囲を増やす感じた。

あたしがそんなことを考えていると、みきちゃんが不満そうに、「先生とか、そういう意味の好きじゃなくてさ……ま、やっぱいいないか」。もしかしてやつちゃんってレズなんじゃない？ 自分で気づいてないだけで」

「もしくはさ、田宮先生に本気で惚れちゃってるとかじゃん？」

二人から散々な言われようをしたあたしは、ふてくされた表情を意図的に作って、

「田宮先生は違うよ。だって……先生は男じゃん」

「げー！ あたしちよつと身の危険を感じるんだけどっ？ わ、やつちゃんと一緒に暗い場所に行ったら完璧狙われるっ。夏祭りとか行ったら絶対やばそう！」

「ちよ、みきちゃん声が大きいっ？」

ただの冗談が冗談じゃない事態を招きそうになって、あたしは少し焦る。……余計なことなんて言うんじゃないかった。

「あたしは一回襲われかけたもんね」

ゆっこがなんか言っている。嘘ばかり言っているのに、その微笑みがやたら大人っぽい。

そうやってわいわい言いながら廊下を牛歩で進みつつ、あたしたちは書道室に入った。

「ここでソクラテスについて少しお話をしてみようと思います。常識というものを考えていく上で、ソクラテスは良い標本で……」

四時限目、現社の田宮先生は、二十六歳とは思えないほど物腰が落ち着いている。

髪は短くて清潔で、お手ごろ価格そうなスーツを着ているのもあたしには好印象だ。

「……ところで、みなさんは常識というものをどう考えていますか」「え？」

先生は思いつきりあたしを見て微笑んでいる。みんなもあたしに注目していて、あたしが答えなければならぬ雰囲気は教室内に一瞬にして作りあがった。そんなご無体な。

「常識……」

あたしは呟いて時間を稼ぐ。

「その人にとって現実的なものなのか、もしくは社会にとって一般的かどうかで決まるものかなって……」

絞り出した答えがこれだった。

「うん、なるほど。社会にとって一般的ではなかったとしても、それが即ち非常識ということではないという例がちゃんと成立しそうな考えですね。天才と呼ばれる人達には、そのような人が多いような気がします」

田宮先生の授業はみんなにも好評で、穏やかな人柄の先生は頼れる存在でもあった。

その後、先生は獄中のソクラテスとクリトンの対話だとかそこらへんの小話をして、自分らしく生きることについての授業に戻った。「——以上で今日の範囲は終わります。あと、今日配ったプリントに先生のメールアドレスを書いておきましたので、自宅学習中にどうしてもわからない箇所があった場合は遠慮なくどうぞ。私は本来

世界史や日本史が担当ですから、そちらの範囲でも結構です。まあこの学校の世界史の先生は優秀ですからね、質問なんかめったに出ないでしょうが」

授業が終わって、やがて昼休み。

あたしが席に着いたままカバンからお弁当の包みを取り出ししていると、

「ねね、さっきのってどんな意味？」

お弁当片手にやってきたみきちゃんが、近くの机をあたしの机にくっつけながら訊いてきた。ゆっこは購買にパンを買いに行っていて、「すぐ帰ってくるから一人で行ってくるね」と言うからあたしたちは教室で待機している。

「さっきのって何？」

あたしが目を丸くすると、

「先生に当てられて答えてたやつ」

「んー？」

あたしは間抜けな声を出してワテンポ置くと、

「つまりさ、自分に出来ないことをやろうとすることってことが非常識ってやつなんだよ。みんなから非常識だって言われても、その人にとって可能だったらそれは一般的じゃないってだけで。それにさ、一般的に非常識だって言われているようなルールとかマナーを知らない人ってゆーのは非常識っていうよりは単に無知なだけで、そーいうことを知ってるのに守らなかったりするのが非常識って言うんだよ。だから、出来るのにやらないって人も非常識ってことになるのかな？」

「わっかんない。ご飯美味しそ」

みきちゃんは本当に分かってなさそうだ。

といっても本質的なことは分かっている人だから、実際はあたしよりもみきちゃんのほうがずっと常識人なのだとあたしはいつも思っている。

「お待たせ」

と、ゆっこは帰ってくると思う、

「あやちゃん、あつちで誰か呼んでるよ。可愛い人」

あたしはゆっこが指差したほうを見る。すると教室の入り口でこちに手を振ってる人がいて、あたしも手を振り返すと、

「ごめん、あたしちよつと行ってくる」

「なにしに？」

「すぐ戻ってくるから、ごめんねっ」

訝しがる二人を置いて、あたしはその子のところへ駆け出した。そして楽しく話を済ませると、バイバイしてあたしは席へと戻る。なんの話だった？」

サンドイッチの包装ビニールを開けながらゆっこが訊いてきた。あたしは我ながら満面の笑みで言う。

「それがね、さっきの人もギルティギアが好きなんだって！」

「……よかったじゃん。あれあたしワケわかんなくて出来ないからそのゲームは、かつてゆっこにそう言われて一蹴されたゲームだった。」

「ゲームならマリオカートしたい」

みきちちゃんの言葉に頷くゆっこ。それにはあたしも大いに頷く。

「それよりさ、」

みきちちゃんは食^はんでいた玉子焼きを飲み込むと、

「あたしもやつちゃんも彼氏作んなきゃ」

椅子に座ったあたしは、お弁当のフタを外して机に置く。そしてプラスチック製の短めの箸を力チャリと握んで、

「そうだねー」

「うわ、どうでもよさそう」

「そんなことはないけど……」

「もしかして、やつちゃんって彼氏作らない主義なの？ 中学の頃もなにもなかったんでしょ？」

「あやちゃんはそうじゃなくて、恋愛が出来ない体質なんだよね」

そうそ……って、誰が恋愛できない体質だ。

「あたしだつて頑張つて告白したじゃん。……駄目だったけど」

「あつ。なにそれ聞きたい！」

みきちゃんが爛々と輝く瞳を向けてきた。

あたしは弁当箱を手に持ちつつ、

「……中学校のころずっと好きな人がいて、三年の二学期くらいに告白したらさ、その人はもう他の学校の人と付き合つてておしまい。大体そんな感じ」

言い終えて、あたしはシュウマイを口に運ぶ。美味しい。

「あやちゃんとあの人はお似合いだったのにね。しかも超仲良かったし」

ゆっこがサンドイッチを食べながら言う。

「なになに、その彼は密かに誰かと付き合つてたの？ いつから？」

「それがさ、」

あたしはみきちゃんに答える。

「中体連が終わつて告白されたんだつて。だからそんな前から付き合つてたつてわけじゃないんだ。その人はそれを誰にも報告してなかったし相手も他の中学の人だったから、そんな話は誰も知らなくて。でも考えてみると、確かに部活が終わつたくらいから様子はおかしかつたと思う」

「あやちゃんもそこらへんから意識し始めてたもんね。もしかしたら、それってあいつに彼女ができたからなんじゃん？ 彼女ができて、なんか男としての魅力が出てきたみたいな」

そういわれて、あたしは考える。

「じゃあさ、彼女が出来てなかったら、あたしは告白する気にならなかったつてこと？」

ゆっこは「あつ」と口を開けて、

「だからあたし、あやちゃんに恋愛できない体質つて言つたのかも。つまりさ、人の旦那にしか恋が出来ない不幸な女つてことじゃない？」

「ことじゃない」

とあたしは思いたい。

「ってかさー、やつちゃんって中学のときなんにもなかったっていうか、その男子とよろしくやってたってことじゃん。一途でいいよね」

「一途っていうか、まあ……」

あたしがはにかむと、

「でもそろそろ付き合つとかないとやばいんじゃない？ もう高校生だよ？ 自由に恋できるのって今くらいなんだしさ」

すぐ奈落に落とされた。それは分かっているつもりだけど、彼氏なんて作ろうと思って作れるもんじゃないし、一人でどうこうするものでもないし。

「そうかなあ……」

みきちゃんは天井を見上げると、思い出したようにさっさとお弁当を食べ始めた。

そして、みきちゃんは呟くように言う。

「——恋愛って結局、一人でどうにかするものなんじゃない？」

「ん……」

「とにかくさ、わたし達も頑張ろっか」

あたしは頷いて、弁当をつつく作業に戻る。

……恋愛は結局、一人でどうにかするもの。

みきちゃんが何気なく言ったその言葉は、あたしの心を暫く捉えて放さなかった。

ゆっこからメールが来た。

「あやね。晩御飯食べてるときはケータイ仕舞いなさい」

「む」

お母さんに注意されて、あたしはケータイを閉じて隣の椅子に置く。

そしてご飯の茶碗を片手にハンバーグに舌鼓を打った後、

「そういえばね、お父さん。学校に面白い男子がいたんだよ。イワンティーノって呼ばれてんの」

「えらく良い名前だね。イワンとティーノに分けるなら、キリスト教のヨハネと、スペイン語での判断の正当さを意味するティーノっていう言葉になる」

「ティーノってイタリアじゃない？」

「ロシアとイタリアに分けるならイヴァントとイノになるな。可愛いらしいイヴァント、日本的に言うと、あやねっちのようにその人をイヴァントっち、と呼ぶニュアンスになるか。もっとも、イワンティーノそのままの表記でも通用するかも知れないな。その場合、何を意味するかは分からない。単にそういう人名だったりするかもね」

「ふうん。じゃああたしこれからイワンティーノ君のことティーノ君って呼ぼうかな？」

「理性的な人なのか？」

「むしろ本能で生きてるような感じがするんだけど、なんかね、まっすぐな人だから間違ったこととかしなさそうなの。しないっていうか、なんだろ」

「無矛盾な理論は結果においても矛盾を含まない」

「そういう感じかな。なんだかイワンティーノ君ってね、全然矛盾してないって感じなの。すごく綺麗な人」

「きつと、その子の人格はリトルピープルが占める割合が広いんだ

ろうな」

リトルピープルっていうのはエジソンの言葉で、頭の中に存在して発明の閃きをもたらしてくれるセンシティブな住人達のことだ。リトルピープルは大人になればなるほど居なくなるもので、実は九十九パーセントの努力と一パーセントの閃きという言葉は、子供の頃のリトルピープルが一パーセントでも残っていれば九十九パーセントの努力でなんとかなるという意味の、つまり努力よりもセンスの重要さを語っていた言葉だったらしい。

「ふうん」

あたしはお父さんの言葉を頭のすみに置いて、もそもそとご飯を食べる。

「そうか。あやねはイワンティノ君が好きなのか」

あやうくご飯で窒息しそうになった。

「はあ？」

「あやねもやつと過去の恋を忘れることができたのねえ」

お母さんまで。

あたしは眉をよせてご飯を突つつきつつ、

「勝手なことばかり言わないでよ。ほんとにもう」

「だってあやね、今までは決まった男の子の話ばかりだったでしょ？ 新しい人が見つかってよかったじゃない」

「だから、なんでそうなるのかな。嫌いじゃないけどさ、それとこれとは別の話じゃん」

「お母さんも心配してたのよ？ あやねは失恋しちゃうと暫くは何もないんだろうなって思ってたけど、意外と早かったわね」

またお母さんはこっちの話を全然聞いてない。違うつつってんのに。

「あやねはお父さんの悪いところが似て、明らかに恋愛しにくい頭になってるからな。はっはっは」

笑ってるけど、ちょっとその話かなり気になるから詳しく教えて欲しい。

まったく、出張からやつと帰ってきたと思ったたらこんなだ。きつかけをつくったのはあたしだけど、好きとかそういう意味じゃないっていうのに。

だけど、恋愛しにくい頭っていうのは当たってるかもしれない。

「恋愛しにくいって、どんなところ？」

お父さんは「ああ」と言っ

て、「必要かどうかで対象を判断するところだな。あやねはもっと可愛げのある考え方をしたほうがいい」

ん……みきちちゃんたちと比べてみても、確かにあたしは可愛げがないかもしれない。

けど、そんな考え方はきつとあたしには必要不可欠なのだ。みきちちゃんやイワンティノ君みたいに根が良い人とは違って、本当のあたしは冷たくてひどい人間だから。

「あたしは、自分の気持ちを素直に言っ

ていいほどできた人間じゃないの」

「あやねは主婦の考え方になりすぎてるんだ」

「主婦？」

「やりくり上手な分、自分を抑えてしまってるってことだな。あやねくらの女の子はまだ贅沢だとか無駄だとかそんなことは考えないで、欲しいものは「欲しいっ」ってねだってる方が可愛いってことだね」

あたしはハンバーグを見下ろしながらご飯を食べつつ、お父さんの言葉の意味を考える。

——そうだ。

「ねえお父さん？」

「えらく微笑んだりして、一体どうしたんだ？」

「あたしね、ヴィヴィアンの財布が欲しいんだ」

このやり取りを見ていたお母さんはころころと笑う。

お父さんも愛おしそうにあたしを見つめて、笑顔のままにこう言った。

「うん。要らん」

……確かに、お父さんの考え方はちつとも可愛くないかも知れない。

部屋に戻って、あたしはさっきのゆっこからのメールを確認する。内容は、ギルティギアっていうゲームを自分もやっぱりやってみたいというものだった。

突然どうしたんだろうと思いつつメールのやり取りを二、三回交わした後、あたしはゆっこに一言ことわってお風呂場に向かった。

ほかほかですよーなんて一人ごちつつ部屋に戻ってきたあたしは、ケータイに届いていたゆっこからのメールに少し目を奪われた。メールには、恋愛の相談というか、悩みの話が書かれていた。

あたしはベッドに仰向けになって、じっくりケータイの画面を見つめる。

（んー……）

三人メンバーの中で唯一彼氏持ちのゆっこは、どうやら付き合っている相手に気持ち乗らないらしい。……それについて「どうしてかな？」なんて聞かれても、あたしがどう答えていいものやら。

そう思ったりしつつ、明日の学校の帰りにゆっこの家に遊びに行く約束を交わして、持っていたケータイをパチンと閉じた。

翌日、昼下がりの学校の廊下でのこと。

「ハケ代さん、ちよつといい？」

一人で歩いていたあたしは振り返る。あたしに話しかけてきたのは田宮先生だった。

「あ、どうも」

「うん。あやねさんのお父さんはK大学に勤務されていらっしやる方なんだってね。あやねさんは考え方とか、お父さんの影響ってやつぱり受けてる？」

あたしは照れくさくなって少しはにかみながら、
「多分……そうですね」

田宮先生は笑って、

「あやねさんのおかげでいつも授業がやりやすいよ。だから、ありがとって言うておこうと思って。これからもよろしくね」

わざわざそんなことを言うなんて、余程あたしは真面目に授業を聞いているんだろう。

ありがとと言われて嬉しかったことから、先生側のこういう気配りって結構効果があるんだなあと思っっていると、

「それじゃね」

先生は軽く手で挨拶して立ち去る。あたしも頭を下げた失礼しますと挨拶をした。

「ちよつとなにさっきのっ」

みきちゃんがあたしの肩を叩きつつ駆け寄ってきた。

「なんでもないよ」

あたしがみきちゃんに言うと、みきちゃんはキラキラした顔で、
「うわー、態度にちよつと差をつけるなんて田宮先生も男だね。やつちゃん絶対好かれてるって！」

「んー？」

あたしはとぼけてみせる。

「それよりさ、みきちゃんは恋人方面どんな感じ？」

「え？ どしたの急に」

目をまるくするみきちゃん。あたしは軽快に、

「なんかね最近、彼氏がいるっていうのもいいなって思ってた」

みきちゃんはあたしの心境の変化に気づいたようで、顔をパアツと明るくすると、

「じゃあ田宮先生誘惑しちゃえばいいじゃん！」

そんなのじゃなく、あたしはリアルに彼氏が欲しいと思い始めてきた。上手くは言えないけど、今日の朝からそういう感情が沸いてきているのだ。

……でも、だからって先生を誘惑なんかしないけど。

「あたしはさ、普通に付き合ってみたいの。教師と生徒の恋愛なんてアブノーマルすぎるんだもん」

「そうかな？ ああいう大人の人に本気で好きになってももらえるって素敵じゃない？ お互いに学生気分で付き合ってるより、ちょっとハマリそう」

みきちゃんの返事はちょっと意外で、そしてあたしはそれに妙に納得してしまった。

そんなのも良いかもしれない。

相手が本気で好きでいてくれるとしたら、教師と生徒の背徳感なんて微塵もなく、自分もその人を好きになってしまいうさだ。

「なるほどねえ……。一理あるかも」

思っていたよりもそんな関係は茨の道じゃないような気がしてきた。田宮先生に真摯に言い寄られたら、あたしは一体どうするんだろう。ちよつと本気で考えてしまいかも知れない。

「やつちゃんが田宮先生とデキちゃったらさ、正直見てる側としたら面白いよね」

「だって友達が先生と付き合ってるんだもんね。話だけ聞くとちよつと面白いかもね」

「もう付き合っちゃえば？」

「あんまり言つと怒るよ」

ちよつと怒つたあたしにみきちゃんは笑いながら謝って、

「でもさ、良い傾向じゃない？ やっちゃんって無駄に考えすぎる
っていうか、そういうところありそうだし」

返す言葉もなかった。まったくもってその通りだ。

「でも、普通の恋愛かあ。それって実は一番どこにもないんだよね」
なんて、みきちゃんが突然遠い目をして言う。

「どういうこと？」

訊ねるあたしにみきちゃんは言った。

「男子って、変態しかいないってこと」

それが普通なんじゃないかな、とあたしが言つと、みきちゃんは
「確かにそうかも」と軽やかに笑った。

そんなみきちゃんにあたしは言う。

「あたしが言いたいノーマルな恋愛っていうのはね、好きな人と付
き合えるってこと」

「なるほどー。だったら相手が女子でも、自分が好きな人だったら
普通ってことになるもんね！」

……あたしは教師とか女子を好きだとか、みきちゃんはあたしを
一体どうしたいのだろうか。おちよくりたいに決まっていた。

「……あたしは普通の男子がいい」
と、切に願うあたし。

——だけこの後、あたしはみきちゃんの言葉を笑い飛ばせない
ようなとんでもない事態に見舞われてしまうのだった。

学校が終わって、あたしはゆっこの家にやってきた。

今はゆっこの部屋で彼氏についての詳しい話を聞きながら、あたしは頷いたり相槌を打ったりして聞き役に徹しているところだ。

「……だからわたし、付き合ってもなんだか微妙なんだ。彼氏になにか不満なところとか、気づかないうちにあるのかな？」

ゆっこはベッドの上に腰を据えて、大きなサメの人形を抱いて体を揺らしている。

「うーん……」

あたしは自分の頭の中を整理する。

「えっとね。結局はどんな問題も、性質的には二種類のものに分かれちゃうんだよね」

「どういうこと？」

尋ねるゆっこにあたしは答える。

「算数と数学の違いでね、算数の本質っていうのは『これはなに？』っていう疑問を解決するところにあって、数学は『それはなぜ？』っていうのを解決するためのものなの。つまり、算数は概念を言い表すための学問で、数学は考え方を説明するための学問なんだ。ゆっこは自分の気持ちがわからないってことだから、これは概念的な、算数的な問題だよな」

「あーうんうんっ」

ゆっこが無邪気に元氣良く頷く。あたしも調子良くなって、

「だからさ、ゆっこは自分以外の他のなにか……つまり、外的要因で悩んでるわけじゃない。ゆっこの悩みは内的なものにあって、これは算数で四則の概念を理解するみたいに解決するような問題なんじゃないかな？」

「ん、よくわかんなくなってきた」

人形を抱きしめたまま首を傾げるゆっこはちょっと可愛い。長年

の友人だ。

「煎じ詰めて言えば、ゆっこ達は特別な関係なんだけど、ゆっこにとっては彼氏がまだ特別な人ってわけじゃないってこと。ゆっこの中の好きっていう概念が、恋人的なそれと合致してないの。ライクとラブの違いだよ」

あたしがここまで言うのと、ゆっこは静かに、

「……そうかも。わたしね、今まで人を『好き』っていう気持ちを特別ななんて思ったことがなかったもん。彼氏のこと嫌いじゃないはずなのになんだかもややしてたのは、あたしが特別な人っていうのを知らなかったからなんだ——」

あたしは考え込んでいるゆっこを見つめた後、

「でね、ゆっこはそのまま付き合っていていいって思うよ。暫く付き合ってみても特別な人にならなかったとしたら、それは相手との相性が良くなかったってことじゃない？ でもゆっこの彼氏って良い人そうだし、そのうちゆっこのほうも相手を大好きになれるって」
言いながら、あたしは自分でもその言葉を教訓にしていた。

……実はあたしこそ、好きな人としが付き合ったりしちやいけな
いって思ってた人間だ。

だけど、相手が自分を好きでいてくれるのなら、その人とにかく
く付き合ってみるってことも悪いことじゃなくて、むしろそうする
ことは大事だったのだ。あたしが恋愛できない体質だったのは、こ
んなところにも一因があったのかも知れない。

そうやってあたしが沈黙考していると、

「あやちゃんって、なんか……可愛いね」

ゆっこはなにかを考えるような瞳で、あたしを見つめながらポツ
リと呟いた。

なんだか、こんな様子の人をどっかで見たことあるような気がする。
る。

「……………」

ゆっこは沈黙する。

「……な、いきなり黙ってなんかあったの？」

戸惑うあたし。やっぱりなんだかゆっこの様子が変だ。

あたしが当惑して挙動不審になってきたころ、呆けたような顔をしていたゆっこは、

「……ごめん。わたし、なんて言っているのかわかんない。なんだか……あやちゃんがすごく可愛く見える」

ゆっこがなにを言っているのかわからない。

あたしが困惑して視線を泳がせている間も、ゆっこは無言の圧力をあたしに与え続けている。

見つめ合ってみて、ようやくあたしはこの状況を理解した。

どこかで見たことがあると思ったら、ゆっこの瞳は、繁殖期の動物がメスを見るような色になっている。つまり……。

——いきなり広がった重い空間にあたしは息を呑む。

（ちょ、そんな目で見……）

そこでゆっこが身じろぎして、あたしはびくつと反射する。

欧米女性ばりにその気に満ちているゆっこは、とろけるような瞳をこっちに向けてくると――。

「……ねえ、しよつか？」

もうクラクラしてきた。

……実際にそんなことを言われると、「冗談でごまかしたりなんて選択肢は出てこない。相手と同じくらいこっちも本気で答えなければならなくて、今は茶化すのはなしだよという状況だ。

目の前のことが信じられなくて、こんなの絶対にありえないと思うのに、現実としてこれは疑いの余地がない。

多分、一等の宝くじが当たったときもこんな感覚になるような気がする。

（……一等の宝くじ？）

あたしは自分の比喩の意味を考える。

——告白すると、この機会にちよつと揺れ動いている自分もいる。女の子同士は気持ちいいって聞くし、それに、ゆっこみたいに格

好い女の子からこんなことを言われるなんてことはもう絶対にな
いだろう。二人だけの秘密にしたら――？

（つて、それってあたし、受け入れる方向に考えがいつてるんじゃ
……）

あたしが自分の考えをたしなめていると、

「なにも考えないでさ、チューだけ一回してみない？」

「ち……？」

「いいじゃん。減るもんじゃないしさ、こんな機会めったになくな
い？」

あたしの心を読み上げたような台詞をゆっこは言っている。

「この際だから経験しとこうよ。だめ？」

「やつ……」

……ゆっこの押しに負けて、あたしは了承する意味でゆっくり頷
く。

それを確認したゆっこは、

「こっちの場所の方がいいよ」

笑顔でベッドをポンポン叩き、あたしは呼ばれた場所にひっそり
と進む。

そして近くに座ると、あたしとゆっこは唇を重ねた。

――一切の思考の停止。

ゆっこの華奢な手があたしの首や背中を辿ってゆき、やがてあた
しのわき腹を撫で下りていく。

肺から出る空気が熱い。息を吐くことができない。

熱い空気はあたしの喉からやつと漏れ出し、これによってあたし
は、これがあえぎ声の正体なのだと知った。

――なにも考えないで、一回だけ。

キスだけでいいなんて言うのはただの口実だつていうけれど、確
かにそれはそうなのだ。

そう――これだけで終わりなんて、そんな嘘みたいなことは……
ありえないから。

家に帰ってしばらく。

「どうした？ 制服も着たまんまで」

帰宅したお父さんが、ソファーにうつぶせになって寝ているあたしに訊ねる。

「んー……」

あたしは腕の上に寝せていた頭をずらして横を向く。ガラスのテーブルが見えただけで、お父さんの姿は見えない。

「ねえお父さん？」

「ん？」

「やつぱりなんでもない」

そしてまたあたしは顔を埋める。

「お父さんチョップ！」

脳天に打撃を食らってあたしは痛いと叫んだ。

「もう！ なにすんのっ」

頭に手をやりながら身体を起こすあたしに、

「なにか悩みがあるなら言いなさい」

実はちよつと友達の女の子とイケナイ関係をしてしまってモヤモヤしていますだなんて言えるはずもない。

「……普通って、一体なんなのかな」

あたしは目を伏せがちにして言う。

「なんだ、普通じゃないことでもしてるのか？」

それには答えられない。

「ま、なにしてもそれが常識で説明出来るなら気にすることもないんじゃないか」

「普通と常識って違うの？」

「範囲が違う。普通というものは必ず常識の集合内で語られるからな。つまり常識っていうものは、普通というルールを説明するため

の公理のようなものだと言えるのかもね」

「どういうこと？」

「煎じ詰めて言えば、あやねの中に矛盾がないなら、普通じゃないことをしてもそう心配することはないってこと」

あたしは眉を寄せる。

「良い人は悪いことをしないっていうのはさ、イワンテイーノ君みたいな人のことじゃないの？ あたしは単に常識がないだけなのかも知れないじゃん」

お父さんは悠然と構えたまま、

「まあ、常識なんてものを基にして考えれば、自分が普通だなんてだれにも自分では判断できやしないさ。あやねの普通が曖昧になっているというのなら、まずは自分をまっすぐ見つめられるようにならないといけない」

「……そうは言っても、自分を自分でわかるのは難しいよ」

そうやってあたしとお父さんが話をしているところに、コーヒーマグを持ったお母さんがやってきて、

「お母さんには二人の話が良く分からないんだけど、あやねは今、自分に素直になれないから悩んじゃってるんじゃない？ あやねの様子を見てるとそんな気がするな」

あたしとお父さんはお礼を言いながら、コーヒーマグに手を伸ばしてそれを飲む。

そして、あたしはお母さんの言葉の意味を頭の中で考えてみていた。

（自分に素直になるってことは、自分が実は女の子が好きだっていうことを認めたほうがいいってことだろうか）

みきちゃんの冗談が本当に冗談ではなくなってきた気がする、あたしはそれは違はずだと、はっきりと強く願った。

恋愛は結局一人でするもの。

あたしはみきちゃん言葉を思い出していた。

「ハケ代さんって、いつもイワンティーノ見てるよね」
「いつ？」

教室の窓際の席に座っているあたしに、本郷寺君が話しかけてきた。

窓の外には女子の先輩らしい人と一緒にいるイワンティーノ君がいて、その二人を遠目であたしが見ていたのは事実だった。

「べ——別にいつも見てるわけじゃ、」

「その夏服似合ってるね」
話が飛んだ。

ちなみにあたしの学校の女子の夏服は校外からも人気が高いやつで、襟の色が光るように明るい水色をしているちよつと変わった制服だ。六月も後半、衣替えの時期になってからはこっちの制服を着てくる女子もちらはらと増え始めていた。

制服を褒めてきた本郷寺君は、外のイワンティーノ君を暫く見やっした後、

「そういえば、今度イワンティーノと遊ぶんだって？」
「え？ まあ……」

でもそれは、イワンティーノ君の友達がみきちゃんを好きだということから、それじゃあ今度四人で遊ぼうとなっただけの話だ。

「俺、下心とか抜きにしても、ハケ代さんと普通に話せるような関係になりたいんだよね。だから、良かったら友達にしてくれると嬉しいな」

「そんなの、わざわざ聞かなくっても」
あたしが凝然とした顔で言うつと、

「だってハケ代さん、俺、避けてない？ こうやって話しかけるの

も結構勇気必要だったんだけど」

「避けてないよ」

正直苦手だとは思っていたものの、避けてるように感じていたのならそれはちよつと申し訳なく思った。

「でも、なんでいきなり？」

あたしが言うと、

「こうでもないしと八ヶ代さんと話せそうになかったから。ほら、俺たちってタイプ違うじゃん？ タイプ的にはなんか接点がない感じだけど、八ヶ代さんとは交流しときたいなって思った。無理やりごめんね」

なんだか本郷寺君が可愛いような気がする。

無理やりというか、さっきのはただ伝え方が不器用なだけのような印象があつて、女の子慣れしてそうな本郷寺君を考えるとギャップがすごい。

「あたしの方こそごめんね。これからよろしく」

友達になって下さいと実直に言われるのは素直に嬉しい。

「よろしく」

と本郷寺から握手を求められて、もちろんあたしも応じる。

「じゃあ、今度からは名前で呼んでいい？」

「名前って？」

「あやねちゃん」

「いいよ。あたしは本郷寺君って呼ぶ」

「やった。了解」

そしてケータイのアドレスを交換すると、本郷寺君は席を離れていった。

あたしは外を眺めてみる。

イワンティーノ君はもういなくて、あたしはそのまま頼杖をつく
と本郷寺君のことを考えてみた。

（悪いところはないんだけど……）

やっぱり、恋愛対象にはならない。

「……あたしはどうして、そう思ってるんだろ」

小さく一人ごちて、やっぱり自分のことはわからない、なんてことを実感していた。

「ハケ代さんいるー？」

と、教室の入り口でイワンティノー君があたしを呼ん……、

「ハケ代さん？ やーがしろさーん？ あれ、ハケ代さんっ？
いない？ やがしろさーん！」

あたしを何人呼ぶ気だと思いつつ、

「やっちゃん呼ばれてるよ？」

みんなからクスクスと言われつつ、あたしは笑っている友達に軽く反撃をしながらイワンティノー君の元に駆け寄る。

名前を呼びすぎとあたしはイワンティノー君のおなかをつついて、
「来たよ、どうしたの？」

「うん。あのさ、今度四人で遊ぶ約束のことなんだけど……」

そこまで言うと、イワンティノー君はあたしを廊下に招いて周囲をくると注意し始めた。なんだろう。

「家で遊ぶんじゃないくて、買い物に行きたいんだけどいい？」

「ん、別にいいけど……」

「それで頼みがあるんだけどさ、」

首を傾げるあたしに、イワンティノー君は言った。

「——買い物するとき、俺と二人っきりで周ってくれない？」

土曜日の朝。

あたしの部屋は洋服が散乱していて、雑然とした様相を呈していた。

「……………」

姿見の前で服を合わせて、あたしはまたその服を却下する。

そろそろ約束の時間なのに着ていく服が決まらない。あせってきた。

（あたし、こんなに全然可愛い服持ってなかったっけ……？）

気に入っていた組み合わせも今日はしっくりこず、今は急ピッチでいろんな着こなしを試しているところだった。服を畳んでるヒマなんてあるわけもなく、あたしはとりあえずベッドの上に放り投げて済ませている。ここに投げとおけば、帰ってから片付けざるを得ない。

Tシャツにデニムはもさく見えるような気がするし、綺麗なスタイルもなんだか違う。

据え付けのクローゼットを漁っていたあたしは、ふと、一年前くらいに買って少ししか着なかったあるものを思い出す。

気になってタンスから取り出してみたのは、ライトグリーンのシヨパンだった。

あたしの中では「これなんで買ったんだろう」の代名詞となっていたこれ。試しに穿いてみる。意外とありかもしれない。

上には肩まで大きく開いた半袖のホワイトカットソーを合わせて、そのスタイルに同系色のフード付ロングカーデを羽織って少し幼さを演出してみようと狙ってみる。

全部終わって、再度姿見の前に立つ。

こういった着こなしは始めてだったものの、今までよりはしっくりくるような気がする。けど——いいのか悪いのか良くわからない。

とはいってももう時間がなく、あたしはこれで妥協してイワンテ
イーノ君と待ち合わせた場所に向かった。

「あれ？ 休みの日って髪下ろしてるんだ？」

おしゃれの葛藤はなんだったんだろうと切なさを感じていると、
「いやー新発見だったな。ポニーテールも良いけど、そういうのも
似合ってるよ。やっぱり可愛いね、服も白くて」

「そんなことないよ。ありがと」

服の感想は色だけだったものの、素直に結構嬉しかったりした。
髪だってただ下ろしてるだけじゃなく、結構手間をかけて作ってい
たのだ。

彼は白地にオレンジのストライプのポロシャツとベージュのチノ
パンで、スポティッシュな印象がイワンテイーノ君らしかった。

「よし！ ハケ代さん、みきちちゃんに今日は行けないって言っとい
た？」

「うん大丈夫。ドタキャンはやっぱり、ちょっと申し訳なかったけ
ど」

「あーごめんね。お詫びにアイスでも奢るから！」

「え、嬉しい！ いいの？」

「いいよー。途中で買ってこようか？」

「コンビ二に寄る？」

「いや、サーティーワンアイスクリームだっけ？ あそこのクレー
プが美味しいから、そこに行こうかなって」

「あつ、あたしもあそこの好き！ イワンテイーノ君も好きなんだ
？」

「お、じゃあクレープ食べる？」

「ホントにいいの？ 食べたいっ」

「じゃあ今日はめっさ晴れてるし、クレープ片手に楽しもうか！」
「わ、ありがとっ。実はあたしも今日かなり楽しみだったんだ」

盛り上がるあたし達。その理由は、

「あの二人、今日上手くいくといいんだけどなあ」

「あたしもみきちちゃん達には上手くいつて欲しいな。でも、みきちちゃんって意外とシャイだから、帰るって言い出したりしないかな？」

「それがさそれがさ、そうなたらあいつが「俺と二人じゃ嫌？」って聞く対策を立ててるから。多分大丈夫！」

「すご、かなり綿密じゃない？」

「愛が詰まってるからね！」

ちよつと意味は分らないけれど、楽しそうなイワンティノ君を見つめながらあたしも楽しく思いつつ、

「イワンティノ君っておもしろいね」

「いやー、なんてったってあいつが頑張ってるからさ。俺も頑張ってるその姿を陰ながら見守ろうって思ってるね！」

そう。今日はみきちちゃん達を二人つきりにして、あたしたちはそれを密かに観察するという野次馬計画を立てていたのだ。

みきちちゃんと二人つきりになるのは友達も知っているけれど、それをあたしたちがストーキングすることは二人とも与り知らないことで、これはイワンティノ君とあたしだけの秘密だ。その主旨からするとあたしたちが二人でいることや物見遊山な行動にはあまり意味がないものの、「二人がどうなるか見てみたくな？」つまりあたしたちはただ好奇心で動いているだけなのだ。動機がヨコシマなぶん、すごくワクワクしている自分がいることは否めない。

「じゃあ、二人がH E Pに来る前にクレープ買いに行こっか」

あたしは頷く。

H E Pというのは大型ショッピング施設の名前で、大きな観覧車があることで有名なデパートスポットでもある。観覧車に乗った二人は別れるという話もあるけれど、こういった話は結局乗ったら別れるっていうわけじゃなくて、噂の発信源になっている中高生の恋愛成就率が元々低いただけだったりする。擬似相関だ。

あたしたちは駅近くの地下街で買ってきたクレープを片手に、H

EPの近くの適当な場所に二人並んでみきちゃん達を待った。クレイプはやっぱり自分で買おうと言ったものの、イワンティーノ君が奢ってくれた。ちょっと申し訳ないけど、嬉しい。

あたしとイワンティーノ君が生クリームに舌鼓を打ちつつ雑談をしていると、

「お、二人一緒に来たかな」

駅の方角からみきちゃん達が歩いてきた。集合場所はHEP正面玄関だったはずだから、多分駅で鉢合わせたのだろう。

二人は並んで横断歩道を渡って来ている。

「きたきたっ」

あたしは声を弾ませて、少し身を乗り出しながら言う。

そのまま歩いている二人に視線を固定して、イワンティーノ君に、
「ねね、楽しそうに話してるね」

と言うとイワンティーノ君は二人を見て、

『みきつちー。うふふふふふ』

『なーに？ えへへへへへ』

そうやって始めた適当なアフレコに、あたしは思わず笑ってしまった。

「そんなことしたら悪いよ」

あたしはイワンティーノ君の肩を押しつつ、やっぱりウケていた。

「でも、二人とも本当いい感じだね」

「だねー。やっぱり、なんだか邪魔できない感じすんね」

「……どうしょっか？」

「んーあっちは大丈夫そうだし、もう俺たちは俺たちで遊んで帰る？」

あたしもイワンティーノ君と同じ意見だった。

今更ながら、このままみきちゃん達の後をつけるのは悪い気がしてきたし、幸せそうな二人を見てどこか満足した部分もある。かといってこのまま帰るのもなんだから、やっぱりこっちはこっちで遊んで帰ろうとなるのは自然の運びだ。

あたしはイワンテイーノ君の提案に賛成して、

「どこで遊んで帰る？」

「俺、久々に海遊館行ってみたいな」
海遊館。

その言葉を聞いただけでなんだかもうワクワクしてきた。

「あ、いいねー。あたしも行きたいな」

「おし、じゃあ早速行こっか！」

楽しみだねと言いながら、あたしたちは電車を乗り継いで海の近くの海遊館に向かった。

電車から降りて、海遊館前の広場。

あたしはそこに出来ている人ばかりをみて、

「今日も大道芸やってるね」

するとイワンティーノ君は、

「そういえば、俺も一つだけ特技あるよ」

なんだろうと思っていると、彼はあたしに腕を向けて、

「ほら俺、自分で鳥肌を操れるんだ」

ほらほら、と腕を見せてくるイワンティーノ君。

あたしは鳥肌をばやっと思つめながら、イワンティーノ君の予測不能なところに不思議な感心を抱いていた。たまにイワンティーノ君の思考がトレースできない瞬間があるけれど、あたしはその瞬間は嫌いじゃない。つまり彼は、あたしの想像なんか及ばないほどに純粋な人だということなのだ。

今みたいに、なんとなくその純粋さが垣間見えたときは、あたしはどこか幸せな気分になる。

鳥肌を見せられてこんなことを思うなんて珍しいだろうなと自己分析しながら、あたしたちは大道芸人のファイアーリンボーに暫く見入った後、頃合をみて海遊館内に進入する。

意外とあたしの方がはしゃぎつつ、モンタレー湾のエリアまで遊覧してやってくると、

「お、可愛い」

そう言つて立ち止まったイワンティーノ君は、ぐでんと寝ているアザラシをじつと見つめて、

「ここのアザラシっていつも寝てるけどさ、俺ならこのまま一時間は平気で見てられる」

「アザラシはキューキュー鳴くんだっけ？」

「どうだろ？ 奴らは喋りかけてくれたことなかったから」

イワンティアーノ君の返事の表現が面白くて、あたしも顔を緩ませながら一緒にアザラシを見る。

ふと気づくと十五分以上過ぎていて、あたしはハツとして隣のイワンティアーノ君の顔を覗く。すると彼もこっちに気づいたようで、

「あ、次見に行く?」

あたしはとつさに「うん」と答えて、歩きだしたイワンティアーノ君に続いた。

その後も二人で施設内を見て回りながら、ペンギンに「スーパーハード」、口の小さな熱帯魚には「おちよぼさん」、大きいマダコには「イカじゃない人」なんて名付けたりしつつ楽しんで海遊館を後にした。

「そうだ。最後にあれ乗ってかない?」

外に出たあたしは、近くの大きな観覧車を指差す。

イワンティアーノ君は手をかざして観覧車を見つめると、

「ハケ代さんに迫られたらどうしょ」

あたしは軽くイワンティアーノ君を叩いて、

「名前のほうで呼んでくれていいよ」

笑顔で言ってみた。流石に、そろそろ苗字はちよつと堅苦しい気がしてきたからだ。

「んーなんて呼ぼうかな? あやねちゃん……あやさん? あーやん?」

イワンティアーノ君はうーん、と唸った後、

「やっぱりハケ代さんって呼んだほうがしっくりくるかな。良い名前が浮かんだらそれで呼ぶね」

あたしはちよつと寂しく思いつつ、確かにしっくりくる呼び方かと思いつかない気がして、じゃあどんなあだ名がいいだろうと自分でも考えながら、二人で観覧車に向かった。

合コンとかのテクニクで、隣に座るよりも対面する斜め前の席にいたほうが相手と恋に陥りやすいなんていうのがある。あたしはそれの応用で変にイワンテイーノ君を意識してしまわないように隣に座ったほうがいいのかなと思いつつ、二人っきりの観覧車でそんなことをしたら頭がオカシイだけだということに気がついたので素直に対面に座った。

「みきちちゃんたちもHEPの観覧車に乗るかな」

乗り込んで少し経って、下を見ながらあたしが言うと、

「んーわからんけど、乗ったとしたらさ、二人の緊張で中がドキドキな空間になりそうだね」

「うん。ちよつと面白そうじゃない？」

「たままないだろうなあー。やってるほうも、見てるこつちも」

明るく言うイワンテイーノ君。あたしも朗らかに「うん」と頷いて、また視線を外に向けた。

天気が良くて、海も見える。

観覧車は特別な場所だ。ここだけ流れる時間がゆるやかになっていくようで、本当に特別な空間のような感じがする。

(だから……)

あたしが今、少しだけドキドキしているのは、雰囲気の良い場所に感化されているというだけなのだ。

そう考えたりしながら、あたしはゆったりとした時間に身を委ねてみた。

いつのまにかあたしたちも沈黙していて、そして、その沈黙は苦痛じゃなかった。

ありのままでいられる、やわらかな空間。

音がないということは、ここに時間の概念がないのと同じ。

恋人同士がこういった有限の中の無限を求めてしまうのは、つま

り彼らが永遠を求めたがるからなのかもしれない。時間を忘れている間に存在するのは、一緒にいるという空間的な事実だけ。写真のように、そのときだけはいつまでも変わらない。

（——こういった時間を増やすことが、恋愛の醍醐味なのかな）

確かに、こうしていると心地良い。

あたしは外を向いているイワンティノー君をなんとなく見つめて、彼はどこを見ているんだろうと、彼が見ている外に視線を向けながら、

「観覧車って良いよね」

呟くように言う。

「だね。この中じゃなにもできないのに、自由って感じするのはなんでだろ」

イワンティノー君の視点は面白いな、と思いつつ、

「しないといけないことがないからじゃない？」

あたしが答えてみると、

「そっか。なんか面白いなあ」

そんな穏やかな会話を交わしつつ、あたしは、

「また、二人で一緒に遊んでみたいね」

特になにも考えずこんなことを言った。すると、

「俺も楽しいけど、どっかに彼氏が彼女が出来るまでだろうね。」

そうなったら流石にこんなことはしてらんないだろうし、友達っていつでも一応男と女なんだしさ」

と、快活に言うイワンティノー君。

じゃあもうあたしたちが付き合っちゃえばいいじゃん、なんて思いつつ、流石にそんなことは言えないあたしだった。単に丸く収める方法を考えたつもりだったけれど、ちよつと考えてみるとそれは告白以外のなものでもないじゃないか。

「俺たちも周りを見習って、恋人作らないとね！」

「う、うん……」

だからあたしたちが付き合っちゃうのが一番——。

と思ったとき、あたしはイワンティーノ君が嫌がるかも知れないということに全然考えていなかったことに気がついて、そんな自分の高慢さに軽く失望しつつ、少し反省を始める。

ちよつと、あたしは雰囲気の流れ過ぎてしまっていたんじゃないだろうか。それに付き合っちゃえばいいなんて、まるで付き合えることが前提みたいな言い方だ……そもそもあたしはイワンティーノ君の眼中にすらないのかもしれないのに。

まず、あたしの気持ちはどうなんだろう。

あたしがイワンティーノ君と付き合いたいって思っているなら、アピールするのもありだろう。イワンティーノ君のことは嫌いじゃないし、むしろ好きだと感じているのは確かだけど、それは友達以上の気持ちなのかと考えたら判然としない。

(……こんがらがってきた)

よくわからなくなってきたので、あたしは考えるのをもうやめにしてこの時間を楽しむことにした。そして――。

イワンティーノ君に彼女が出来たのは、この数日後だった。

「……彼氏欲しいなあ」

みきちゃんが言う。

「もう夏だしっていうか、あ！ 夏休みになったら男子も誘って海に行かない？ かなり楽しそう！」

結局、イワンティノー君の友達とみきちゃんの恋は成就しなかった。

期末試験も終わって、夏休みまであと少し。七月も中盤だ。

あたしたち三人はいつものように教室で昼食を摂っていて、いつも通りみきちゃんは元気にお喋りをしている。

ちなみに、あたしはご飯を食べ終えてからは頼杖をついてぼけっとしている。

そんなあたしをよそに二人は話を続けて、

「ね、男子だれ呼ぼつか？」

「隣のクラスのイワンティノーは？ あの人来てくれたら面白そうじゃん？」

「でも、あの人彼女いるんじゃないっけ？」

「別に遊ぶだけだから関係ないでしょ？」

と、ゆっこはあたしに顔を向けて、

「ってかさ、あやちゃんどうしたの？ 最近元気ないよ」

あたしは心配してくるゆっこを見て、

「最近元気ないね」

人ごとのように呟いた。

実際、今のあたしは元氣のない自分を遠くから見つめているような感じだった。

これは良くない兆候で、こうなるとあたしはどんどんツマラナイ人間になっていく。なんに対しても興味を持てなくなって、どんなことに対しても面白さを感じられなくなるのだ。

それは自分が未熟な証拠だって知っているから、なおさら元気な
んて出ない。

「やつちゃんも海行くよね？」

「うん」

「おおー」

みきちゃんは感嘆詞を口にした後、

「そうそう、それがいいって！ ポジティブに行かなきゃ。あー、
いい出会いがあると良いんだけどね。ほんと彼氏欲しい」

切望するように言った。

（……彼氏が欲しい、か）

あたしはなおも頼杖をついたまま、黒板をなんとなく見つめる。

正直、海に行きたいという気持ちは全然ない。

それでもあたしが行くことにしたのは、なにか出会いがあるかも
しれないだとか気分転換に行ってみようといったポジティブシンキ
ングからじゃなく、普段のあたしならそうしただろうから、といっ
た諾々とした理由からでしかない。無気力な状態のときは不毛な時
間を過ごしてしまいがちだから、あたしはそうやって行動を決める
ようにしている。

そう思いながら、あたしは自分の元気のなさの直接的な理由につ
いて考えてみる。

原因ははつきりしていた。

どう考えても、イワンティーノ君が先輩と付き合い始めたのが原
因だ。

あたしがわからないのは……、

（どうしてそれが、あたしの落ち込む理由になるんだろう？）

もしかしたら、あたしに振り向いて欲しかったなんていう傲慢が
あったのだろうか。

それとも、恋人が出来たイワンティーノ君に嫉妬してる？

いや、デートみたいなことまでしたのにあんなに早く他の人にい
くなんて……と内心怒っているのかもしれないし、もう自分には恋

人が出来ないと諦めて怠け者になってしまっている可能性だって考えられる。ひょっとして、あたしは身近な男の子が他人の物になってしまうのが許せないほど強欲なのだろうか。

「ふう」

そこまで考えて、あたしは溜息を一つ吐く。

キリスト教的七つの大罪のうち五つになぞらえて考えてみたものの、多分それらは全部違ってる。そもそもそういった感情は人を罪の道に進ませる原因になるっていうものだから、つまりもしあたしが本当に怒ってたり嫉妬してたりしたら、あたしはイワンティノ君を破局に追い込もうと画策するはずなのだ。破局とかあたしはそんなことは考えてないし、望んでもいない。

もし今のあたしに大罪があるとすれば大食と色欲で、つまりこれがきっかけでヤケ食いに走るか男に色目を使い始めるかだ。考えてみて、ちよつとそうなりそうな自分が怖い。

「あやちゃんに考えてんの？」

ゆっこが不審げに声をかけてきた。

あたしはぼうつとしたまま、

「……あたしが食い逃げしたり露出狂になったりしたら、二人が止めてくれないかなーって」

そう答えると、ゆっこは笑って、

「なに言ってるの。それ面白そうだから絶対遠くで観察しとく」

ゆっこはドSだった。

「シゲカヨでも露出狂にはならなそう」

みきちちゃんはハッピーマニア（漫画）にハマっていた。

ちなみにシゲカヨっていうのは漫画の主人公のことで、身体の関係だけじゃないちゃんとした彼氏が欲しくはちゃめちゃんに行動する二十代女性の名前だ。

「心配しなくてもさ、あやちゃんが食い逃げする前にあたしがちゃんとお金払つとくから大丈夫だよ」

ゆっこは笑顔で言ってくれて、

「そうそう、わたしもモザイク用意しとくっ」

みきちゃんそこはあたしが服を脱ぐ前に止めて欲しいけど、
「うん、ありがとう」

二人が優しく、あたしは少し元気を取り戻すことが出来た。

結局海にはクラス中に声をかけて数人規模で行くことになった。

本郷寺君もその中に入っていて、クラスのメンバーで遊ぶなら彼女は連れてこないと言っていた。最近できた本郷寺君の彼女さんは、他のクラスの人のものだ。

そんな中、あたしは海に遊びに行くことについて、

（今の状態で水着を選ぶと失敗しそうだから、今年の水着はゆっこに選んで貰おう）

なんて考えていた。

あたしの元気が出ない理由については、結局なんにもわからなかった。

そして夏休み。

あたしは初めてのうちにゆっここと買い物に行ってビキニを買った。

試しに自分でも水着を選んでみたけれど、ゆっこからの評価は「無理だから」やっぱりあたしは色々と分からなくなっているみたいでゆっこについてきてもらって正解だった。

ゆっこを選んで貰わなかったら今あたしはテカテカの金色ビキニを着ていたのかと思うと、つくづくゆっこにありがとうと言いたい。ということで、あたしはゆっこセレクトのフリル付きのやつを着てみんなと海に遊びに来ている。メンバーは男子七人女子六人の総勢十三人で、これだけいるとビーチバレーもめいっぱい盛り上がるし、いつの間にかボール当て鬼ごっこなんかもやり始める。

案外楽しんでる自分がいて、そうやって自分が楽しめていることに少しホツとした。

昼下がりにご飯（あたしもおにぎりを握ってきた）を食べた後は、何人かずつバラけて海に入って魚を追いかけるか砂遊びでドラえもんを造形するかに分かれた。

別になんの意図も作為もなく、あたしは照りつける太陽の日差しの下、本郷寺君と昼ごはんを食べた場所にそのまま残って座っている。

「やっぱり、こうやって遊んでると楽しいね」

あたしは本郷寺君に言う。

「なんかそんな感じだね」

本郷寺君が言う。

あたしは首を捻って本郷寺君を見て、

「そんな感じって？」

「ハケ代さんどこか気が沈んでる状態っぽいけど、遊んでるときはちゃんと楽しめてるように見えるってこと」

「ああ……」

納得して、あたしは声を漏らす。

それと、本郷寺君は彼女が出来てからはあたしのことをまた苗字のほうで呼ぶようになっていた。まあ、あまり名前を呼ばれることもなかったけれど。

「本郷寺君、彼女さんとはいい調子？」

「いい調子って、特に何もないけど。そっちは？」

「あたしはなーんも」

自嘲するように答えると、本郷寺君は立ち上がりながら、

「ハケ代さんは可愛いよ」

そして砂をはらう。そんな本郷寺君をあたしが見上げていると、
「俺に言えるのはそれくらい。あんまり悩んでもしょうがないし、早めに切り替えていったほうがいいって思うけどね」

あたしの顔を見ながら優しく言って、

「じゃあ俺遊んでくるから、早く来てね」

そして彼もドラえもんを作りに行った。

あたしは後ろ姿を見送って、

（悩まないほうがいいって言われても……）

と、悩むのだった。

少し経って、あたしはペットボトルのお茶を飲み干した後、砂遊びのグループに加わりうと思って腰を上げる。

砂浜は灼けていて、ビーサンを履いていなかったら歩けないくらいだ。

そう思いつつ歩いていこうとしたら――

「あつ……」

人波のなかに見覚えのある人影を見つけて、あたしは思わず息を呑む。

売店に向かっているその人を立ち止まっただま見つめていると、
「やつちゃん、早くこっちおいでー！」

波打ち際でドラえもんを作る班の一人のみきちゃんが手を振る。

「……ごめん、あたしちよつとあっち行ってくる!」

「あっちつてどこー?」

あたしに叫んだ後、みきちゃんは隣の男子からなにやら話しかけられていた。内容は多分「トイレに行ってくるんじゃない?」想像してちよつと嫌だった。

すぐ戻ってくるね、とだけ言つて、あたしは踵を返して様子を伺いながら例の人影に近づいていく。

トイレの前までやってきて、あたしはフリルのミニスカートを手ではっぱと綺麗に整える。

「あれ、がーやん来てたんだ!」

がーやんというのはあたしのことで、あたしをそう呼ぶことにしたのはトイレから出てきたこの人だけだ。

「イワンティーノ君も来てたんだ」

「来てたつてトイレに?」

「海に」

「やー、海は楽しいね。水着の女の子いっぱいだし」

につこにこしながら言っている。相変わらず、その笑顔は可愛い。

「イワンティーノ君の水着可愛いね」

白色にヤシの木なんかの柄がプリントされているハーフパンツをあたしが評価すると、

「がーやんのも俺好きだな。パステルカラーで」

相変わらずイワンティーノ君は色の感想ばかりだった。

「あたし、一歩間違えてたら金色の水着着てくるところだったんだよ?」

「それ駄目なん?」

「ゆっこにね、陸の上でも浮いちゃうよつて言われて」

「うん、違いない」

笑いながらイワンティーノ君が言う。

あたしはふと、この場に二人でいることを急に意識する。

なんだか、こうやって立ち話をしているのがとても楽しい。

(そういえば……)

彼が近くにいると、あたしはどこか満たされるような気持ちになっ
っている気がする。

一番最初に校門で会った日は風邪も軽くなったような気がしたし、
それに、イワンティーノ君と一緒に海遊館で遊んだ日以降、あたし
はなにかを楽しいと感じたことがあっただろうか。

あたしがそんなことをおぼろげに感じていると、イワンティーノ
君は海を指差して、

「ここで話してるのもなんだから、海のほう行こうか？」

うん、とあたしは言って、大勢の人のなかを彼と並んで歩く。

そのとき、ふと思った。

(どうして今まで、あたしは元気がなかったんだろう?)

まるで夢から覚めた朝のように、あたしは今までの時間が全て気
のせいだったような感覚がした。あたしは一体、なにを悩んでいた
んだろう。

身体の右側にイワンティーノ君がいる。

歩くたびに身体がイワンティーノ君の方へ寄っていつてしまうよ
うな気がして、あたしは、その作用のせいで転んでしまうんじゃない
かといった不安を感じていた。

気がつくと、あたしは横で揺れている彼の手を掴んでしまいたい
と思っていた。

「ん？」

「……あ、や、なんでもない」

勝手に伸びようとする右手を、あたしは意図的に引っ込める。

「海遊館、楽しかったよね」

歩きながらあたしが言っていると、

「あれは楽しかったなー。あそこはがーやんと行ったときが一番楽
しかったかも」

「ほんとに？」

「うん。こないだ彼女と行ってきたんだけど、ちょっと違ったなあ」

へえ、と言うあたしにイワンティノ君は振り向いて、
「そういえば、ガーヤンは今日誰と一緒に来てる？」

あたしがクラスのメンバーで来ていることを伝えと、
「そっか。みんなは今どこ？」

そして、

「なるほど。じゃあ俺、彼女と来てるからそっち戻るね。今ちよつと待たせてるから」

「彼女さんどこいるの？」

「今はたぶん海に浮いてるんじゃないかな？」

それ少しサスペンスの香りがするよ、なんて思いながら、

「そっか。じゃあまたね。なんかありがと」

「うんじゃまた！」

走っていくイワンティノ君に、小さく手を振るあたし。

彼がある程度小さくなったところで……

あたしは振っていた手を下げて、その手を見つめる。

あたしが彼の手を握りたいと思ったのは、これがつまり夏の魔力なのか、それとも物質が不安定を嫌って安定を求めようとするからなのか。少なくとも、分かっているのは――

今、猛烈に寂しいと思っっている自分がいることだった。

溜息をどれだけ長く吐き続けられるか、なんてことを自分の部屋でやってみる。

海から帰ってきたあたしは、ベッドに倒れこんで布団を抱え込んだまま、

「……寂しい」

そう言った後、この独り言を駄々をこねるように何回も繰り返して、布団を強く抱き締めたり足をバタつかせたりして思いっきりやりきれない気持ちを発散させた。

少し疲労して、まるで電池が切れたように停止すると、あたしは自分がどうして寂しいのかというさつきまで後回しにしていた命題を考える。

だけど、既に考えるエネルギーなんてない。

いっそのこと、あたらしいことに目を向けてしまえばいいのだろうか。

だけど、それは自分の気持ちを捨て去ってしまったて、あたしがこの気持ちから逃げ出してしまうということなのだ。あたしが直面しているものは大事なものだってわかるから、逃げ出したくなんてない、けど……。

もうこれ以上にも考えたくない。この問題に触れているのが辛い。

そう思いながら、目をつむってそのまま眠ってみようとする。だけど全く寝れそうになくて、しょうがなく身体を起こして机に向かう。寝れないなら夏休みの課題でもしておこうという考えで、打算的な自分にちよつと呆れる。悲しいときくらい、思いっきり落ち込んでいたらしいのに。

机に着いて、あたしはプリントを広げてペンを手に取る。そして課題に手をつけようと思ったとき……。

ふと手を止めて、あたしは学校のプリントを挟んでいるファイルを引っ張り出してみる。

そこにあっただのは、田宮先生のメールアドレスだった。

田宮先生はあたしとは違ったタイプの人だから、先生のことをもっと良く知ってみるとあたしにもなにかいい変化があるかもしれない。

あたしは振り向いて、壁に掛かった時計を確認する。

（……まだ、メール送っても大丈夫かな）

単純に先生の趣味なんかに興味があっただしなんて思いつつ、あたしは先生に何気ない内容のメールを送ってみることにした。

これで自分の悩みが解決できるようなきっかけが掴めるといいな、なんて思っていたことも忘れたくらい勉強に集中し始めていたとき、ケータイが鳴って先生からの返信をあたしに知らせた。

勉強の息抜きなら付き合うよ、という内容で、その文面から漂うとても大人な落ち着きが好印象だった。

あたしはちよつとだけ胸にあっただかいものを感じながら、先生にメールの返事を書く。

先生に学生時代の話を読んだりなんかしているうちに、あたしは先生が意外に話し上手なところを知って驚いた。まるで昨日の晩御飯のメニューがなんだったのかを話すように、自分の時代を基にした男子高校生のエロ本事情なんかを覚えてくれるのだ。

先生からそんな話が飛び出してくるのが意外で、だけどやっぱり田宮先生らしい話の切り口がなんだかとても新鮮だった。

……気がつけば、あたしと先生は深夜までメールのやり取りを続けてしまっていた。

「で、面白かったんだ？」

「うん。それから結構メールしてる」

夏休み某日、あたしはゆっこの部屋でくつろぎながらお喋りをしている。

ちなみにゆっこことイケナイ関係になったのはあの一度きりだ。それにゆっこは健康的に彼氏との関係を回復させて、以前のゆっこのしさを取り戻している。

ゆっこことテーブルを囲んで、あたしがポテチをつまんでいると、

「あやちゃん。一つ訊いていい？」

ゆっこが少し神妙に訊いてきた。

「なに？」

あたしが応答すると、

「先生の話して^{はなし}る最中のあやちゃんさ、若干危なかったんだけど」
危ないっていうと、白目でも向いてたり、後ろにヒットマンが立つてたりでもしてたのだろうか。

「そういうんじゃない、もうすぐ恋する五秒前っていうか、さっきあやちゃん自分がそういう感じだったの気付いてる？」

「んー……」

言われてみればそうかもしれない。先生のことは嫌いじゃないし、いまは良いところだけしか見えてない。田宮先生に^{いだ}あたしが抱いている印象はかなり良い。

そう考えているとゆっこが、

「あのさ、あたしも先生とデキちゃえばって言ってたりしたけど、あれ冗談だよ？」

「別に変な気なんかないって。先生とは普通にメールしてるだけ」
「どうかなー。あたしが心配なのはさ、」

ゆっこはあたしの目をじっと見つめて、

「あやちゃん、ほんとにそれでいいの？ 無理してない？」
そう言われても、とあたしは思う。

「無理なんかしてないよ。なんで？」

「よくわかんないけど、ちょっと様子が変わって感じる」

「ふうん」

あたしはまたポテチを取り出す。そしてそれを口に運びながら、

「実はさ、こないだ海行ったときにイワンテイーノ君と会ったんだ」

「あー、彼女と来てたね。あたしも見たよ」

だから？ と訊かれて、あたしは「別に」と返す。

ゆっこともポテチを食べると、「あー」っと長い髪を揺らして

「もしかしてあやちゃん、やっぱり人の彼氏だけに興味があるようなタイプだったりするんじゃない？」

「ちがっ！ あたしはっ」

とつさにあたしはムキになって反応してしまう。

「あたしは、なに？」

「あたしは、最初から……」

「最初から好きだった？」

「え？」

びつくりしたあたしに、

「え？ って言われても、どっちかっていうとあたしが驚きたいんだけど」

もつともなことをゆっこは言った。

「うん……」

本当のことを言うと、あたしはもう自分でも気づいていたのだ。

いつからかはわからないけど、少なくとも——海遊館のときにはもう。

あたしは、イワンテイーノ君のことが好きだ。

その気持ちにバイアスが掛かっていた理由なら、今はなんとなくわかる。

最初のころは好きな気持ちが曖昧で、それが恋愛感情だとはわか

らなかっただけだ。

その後は、あたしに後ろめたいことがあったから、自分から好きだなんて言うことが出来なかった。

そして今は……。今の今まで、その気持ちに気がつかないようにしていたのは……。

（今さらそんな気持ちに気付いたって、意味ないじゃん——）

そして、辛いだけからだ。

「でもね、本郷寺君は前から言ってたかな」

急に言い出したゆっこに、

「なにを？」

あたしは訊く。するとゆっこは微笑して、

「あやちゃんがイワンテイーノ君のこと好きそうっての。本郷寺君ってあやちゃんのこと露骨に好きだったじゃん？ だからあたし、結構それで本郷寺君と話してたんだよね」

「そっか」

元氣なく言うあたしに、

「でもちよつと遅かったかもね。こればかりはしょうがないけどさ」

淡々とゆっこが言う。

「で、どうすんの？ これから」

「今はまだ、なんにも考えたくない」

「そう」

ゆっこはそれだけ言って、部屋に静寂が広がる。

この沈黙をどうにかしたいということをあたしが冷静な部分で考えていると、

「好きなら好きってちゃんとと言わないと、なんにも始まんないよ？ ゆっこがあたしの顔を覗き込みながら言う。

そんなゆっこと暫く顔を向き合わせた後、あたしは顔をまっすぐにして

「あたし、本当は彼氏なんて欲しくないのかな」

どうして？ と訊ねるゆっこに、あたしは目を伏せがちにして続ける。

「この人と一緒にいたいなって思うことはあるけどさ、あたしは別に、誰かに一緒にいて欲しいって思ってるわけじゃないから」
するとゆっこは、

「それはさ、誰かと一緒にいないとダメっていう人もいるだろうけど、だから彼氏を探すってわけでもないんじゃない？ 彼氏が欲しいっていうのは、一緒にいたいって思える人と会いたいってことでもあるでしょう？」

……彼氏が欲しいっていうのは『誰かに一緒にいて欲しい』っていうことだと思っていたあたしは、ゆっこの言葉にハツとした。

「……ゆっこの言う通りかも」
「そう？ ありがとう」

そしてあたしは、もう一度自分の気持ちを確かめてみる。

そう思うと、今までよりも素直にイワンティアーノ君のことが好きだという気持ちが強くなる。

そして、その気持ちがはっきりとわかったぶん、他にもはっきりとわかったことがある。

——もう、イワンティアーノ君には彼女がいる。

それは、あたしと彼を隔てる一つの壁だということ。

そしてもしその壁がなくなったとしても、あたしは彼と一緒ににはなれないのだ。

あたしにはもうその資格がないから。あたしは彼から遠い。

そう。距離が遠ければ、それを埋めるために時間が沢山必要になる。あたしがイワンティアーノ君に近づきたいとこれからも思っているとしたら、あたしは多くの時間を失うだろう。

（もう……諦めたほうがいいのか）

そう思えるほどの隔たりがあることを、あたしは明確に感じてしまったのだった。

夏休みも終わって、新学期が始まった。

現社の授業が終わった後、あたしは教卓に駆け寄って、

「先生、はいこれっ」

笑顔で渡したのは、お気に入りの椎名林檎のファーストアルバムだ。

「ありがとう。借りるね」

ケースを手で持ち上げて、田宮先生があたしに微笑む。

あたしについてきていたみきちゃんは、

「これ、やつちゃんが大好きなやつだっけ？」

「うん、林檎ちゃん」

みきちゃんはあたしと先生をためつすがめつ見た後、

「え、どういふこと？」

目を丸くするみきちゃんに、

「このCDはあやねさんが薦めてくれて、それに先生が高校生のときに付き合っていた人も好きだったから懐かしくてね。貸して貰ったんだ」

実のところ、先生の前の彼女が林檎ちゃんを好きだったっていう話からあたしが薦めているから、順序は逆だけど。

「えー、先生の元カノの話超ききたい！」

ぱつと花を咲かせたみきちゃんに先生は微笑んで、
「恥ずかしい話しかないから、あんまり話せないな」

その内容を三つ四つは知ってるけど、とあたしは思ったものの、
ここはなにも言わないことにした。

「それじゃ、二人ともまたね」

先生はあたしに「CDありがとう」と言って教室から出て行った。
「そっいえばさ、やつちゃん聞いた？」

「なにを？」

「イワンテイーノ君、先輩と別れちゃったらしいよ」

心臓がどきりとした。

「え、なんで？」

「詳しくは知らないけど、そんな話聞いた」

するとみきちゃんは、あたしの制服をちょいちょいと引つ張って、
「先生にCD貸してるよりさ、イワンテイーノ君になんかしちゃえば？」

周りに聞こえないように言った。

「なにもしないけど……」

そして押し黙るあたしに、みきちゃんが、

「イワンテイーノ君って結構モテてるし、今がチャンスなんじゃない？」

「チャンスもなにも、なんであたしがそんな」

「だってやつちゃんあの好きでしょ？ 見てたら分かるって」

明るく笑うみきちゃん。あたしは悩み顔を浮かべる。

あたしだって本当は色々したいけど、そう簡単に出来ない理由があるからなんにもしないんじゃない。

「どんな理由があるの？」

「……あ、」

しまった、口に出てたみたいだ。

「えっと、なんでもない」

「えー？ 話してくれないっていうのはひどいよ？」

ぐ。そう言われても……これだけは誰にも言えないのに。

あたしは困りつつ少し考えて、

「イワンテイーノ君は純粹だけど、あたしはそうじゃないもん」

「やつちゃんが？ どうして？」

あたしは視線を外して、

「まあ、色々あって……」

話を聞いていたみきちゃんは、また賑やかに、

「自分で可能性潰してたらなんにも出来ないってっ。やつちゃんが

好きなんだったら、それだけでいいじゃん！」

背中を押してくれるのは嬉しいけれど、あたしはそれに応えられない。

あたしは何を気にしているのかといえば、ずばり、ゆっことのとだ。

お父さんにイワンティノ君のことを好きなのと言われてあたしが否定したのは、あたしがまだ自分の気持ちに気付いていなかったからだし、そして、本郷地君を良い人だと思ってもなんとなく距離をとっていたのだって、イワンティノ君のことが心のどこかで好きだったからだ。

だけどあたしは、ゆっことあんな関係になっちゃった。

あの時のゆっこは不安定だったというのがあったけれど、ゆっこに比べてあたしは、少し興味があつたからというだけでキスに応じたのだ。そうやってただの好奇心だけでなし崩しの体の関係になるあたしが、どうしてぬけぬけとイワンティノ君に好きだなんて言えるのだろうか。

このわだかまりをいつか時間が解決してくれるまで、あたしは、自分から恋愛なんてとても出来そうにない。

でも……

（なんでイワンティノ君は別れたんだろう？）

それが気になるのは確かだったので、あとでその理由を知っていそうなゆっこに訊いてみようあたしは思った。

放課後、クラスで学級係に任命されているあたしは、雑用をあらかた済ませて教室で一人帰り支度をしていた。

「ポスターの張替えご苦労様。これは先生の奢り」

不意に入ってきた田宮先生は、紙パックのいちご牛乳をあたしに見せる。

「そんな、係の仕事でわざわざ差し入れなんて」

「これはCDを借してくれたお礼にね。本当はケーキとかが良いかなって考えていたんだけど、あまり高いのも、あやねさんが気にしちゃって逆に迷惑になりかねないなって思ってた」

なるほど、と納得して、いちご牛乳が好物なあたしはカバンを抱えて先生に小走りで近づく。

そして感謝の言葉を笑顔で言ってジュースを受け取ると、

「ケーキでも良かったんですけど」

なんて冗談を言ってみた。

すると先生はあたしに微笑んで、

「あやねさんは付き合ってる人いないって言ってたよね」

あたしはちよつと間をあけた後、明るい調子で、

「あたしには恋愛って難しくって」

我ながら悲しいことを言った。

自分の情けなさを心の中で自嘲していると、

「どんなことが難しいの？」

先生は少し芝居がかったような驚き顔を見せて訊いてきた。

（そんなことを訊かれても……）

あたしはちゃんと考えてみる。自分が恋愛出来ない理由――。

（……なんだか、泣きたくなってきた）

考えようにも、もうなにも頭に浮かんでこない。

どうして彼氏が出来ないのかななんて、もう考えるのも嫌だ。

今まで理由は沢山考えていたはずなのに、それに関してあたしの中に残っているのは侘しいと思う気持ちだけ。

「……あたし、魅力ないですかね」

結局、それに尽きるのかも知れない。ホントに泣きなくなってる。

「キスしてみる？」

「……へ？」

「冗談」

先生は笑って、

「けどこういう冗談を言ってみたくなくなるくらい、あやねさんは魅力的な人だよ」

優しく言われて、その穏やかな瞳が心地良くて……。

「先生……？」

あたしは田宮先生を見つめた後、先生に体を寄せて静かに目をつむった。

すると先生は、あたしの荷物をどこかへ置いて、緩やかにあたしの肩を掴む。

先生に抱きしめられて、温かい気持ちが胸に広がる。

自分の唇になにかを予感しながら、そのまま――。

と、そのときだった。

「あーイワンティーノ先に帰つていて。俺、教室に忘れもんあるから」

廊下から聞こえてきた声に、あたしと先生はお互いに身を引いた。驚いた様子の先生も、教室に入ってきた男子に振り向く。

声を聞いただけで分かった。入ってきたのは本郷寺君だ。

「イワンティーノも待ってるから、早く帰ろっか？」

本郷寺君が、あたしを見ながら親指で廊下を指す。

あたしはキョトンとしたものの、うん、と言って教卓の上に置いてあった力バンを取って進み出す。

「あやねさん、忘れ物」

「あつ」

取り忘れていたジュースを、先生が手に取ってあたしに渡す。先生は拳を口にあてて一つ咳をすると、微笑みながら「じゃあさようなら」とあたしに別れを告げた。

……本郷寺君は、廊下ではなにも言わなかった。

「ごめん。俺、全部見てたんだよね」

昇降口を出て、学校内の並木道。本郷寺君は、あたしと田宮先生が教室で二人きりだったのを見かけて、少し気になって様子を窺っていたということを教えてくれた。

「邪魔だったんならごめん。まあ、邪魔するつもりで話しかけたけどさ」

「そんなことないよ……ありがとう」

本郷寺君があたしを止めたということには最初から気付いていた。さっきの本郷寺君の言動には一貫性がなくて、色々おかしいところがあったからだ。

「イワンティーノ君は……いるはずないよね」

「うん。嘘」

「なんでイワンティーノ君？」

本郷寺君は立ち止まってあたしに振り向くと、

「ハケ代さんって、イワンティーノが好きなんじゃないの」

あたしも立ち止まる。

本郷寺君から顔を逸らして沈黙していると、

「ああいうのって良くないと思うな。なんであんなことすんの？」
後ろめたさもあって、淡々と言う彼の言葉が胸に突き刺さる。

「じゃあ——あたしがさ、イワンティーノ君を好きだなんて言っているの？」

吐き捨てるようにあたしは言う。

そのまま、静かにしている本郷寺君に、

「あたし、女の子とエッチしたんだよね。どうしてだかわかる？」

「知らない」

あたしは本郷寺君に顔を向ける。もうヤケだ。

「してみたかったから。それだけ」

「……………」

「そうやって体のことしか考えてなかったあたしがさ、どれだけ純粹に人を好きだって言っても、説得力なんて全然ないじゃん。あたし自身が、そういう性欲で物を考える人って信じられないの」

自分で言っててたまらなくなってきた。

——こんなこと、人に言っただけじゃないかと思っていたのに。だからいつか自分で忘れてしまえることを望んでいたけれど、もう止められない。

あたしは泣きじゃくってしまいがちながら、

「イワンテイーノ君のことは好きだって思うけどっ！　もしかしたら、それだって結局はあたしの下心なのかも知れないって思っちゃうんだもん！　興味本位で女の子とエッチしちゃうようなあたしがさ、純粹に好きですだなんて言うのは馬鹿みたいじゃん！　本当は好きなのにつ！　好きだって思うとそれが自分でも本当なのか信じられなくなってきたさっ！　もうどうしようもないんだもんっ！」

嗚咽にまみれて、あたしは訴える。

心の中にあつたわだかまりが、形になって外へ流れて行く。

……暫くして、あたしは息を整えながら、

「…………ごめん。意味わかんないよね」

実際にさっきのあたしはなにを言っているのか分からなかったかもしれない。

でも泣いたら少しすっきりして、だいぶ楽になった。

「あのさ、」

本郷寺君はあたしの具合を確かめながら、

「家まで送ろうか？」

「いい、大丈夫」

あたしは涙を拭きながら歩き出す。

「ごめんね。一人で帰るか——」

本郷寺君を追い越そうとしたあたしは、急に右腕を掴まれて停止した。

真摯な顔を向けてくる本郷寺君にびっくり眼まなこを向けていると、

「……明日の朝だけど、暇？」

「明日つて、学校があるんじゃない？」

本郷寺君はあたしから手を放して、

「七時までにグラウンドに来てくれない？　そこで八ヶ代さんの悩みもなくなるかもよ」

「……………」

どういうことだろうと、あたしは戸惑って考える。

「どういうこと？」

とにかくそのままを質問してみると、

「来てくれたら多分わかるから」

訝しむあたしに、本郷寺君は続けて言った。

「泣いて解決するのもいいけどさ、泣くんだったら、他の方法も試してからにした方がいいって思うよ」

確かに……まだなにも解決したわけじゃない。

だけど、他の解決方法なんてなにあるんだろう。

あたしは暫く考えてみたけれど……

結局見当もつかないまま、一日が終わった。

早朝、あたしは誰もいない校門をくぐる。

こんな時間に登校するのは初めてで、あたしは朝の学校の静けさを知った。

気持ちのいい朝だった。

学校の敷地内を歩いてグラウンドに近づきながら、本郷寺君の姿を探す。

（そもそも、どうしてこの時間にグラウンドなんだろう？）

人がいないから、なんて理由は考えにくい。やっぱりあたしには本郷寺君の意図がまったく掴めない。

そんなことを考えていると、不意にグラウンドから、

「——んあっ！」

えらく力の入った声がした。

続いて、遠くへ走っていく音。

流石にあたしでも分かった。

この場所と時間を指定した理由の、単純で明快な答え。

そう。朝のグラウンドには朝練中の部活動生がいるのだ。

そして、槍投げの槍を拾ってこっちの方へ戻ってきているのは…

…。

「……おはよう。イワンティノー君」

「おー、おはようがーやん！」

めちやくちゃ笑顔のイワンティノー君だった。

「なんか俺に用があるって訊いたけど、どうかした？」

彼は競技用の槍を地面に突き刺して言う。

あたしは微笑んで、

「それ、本郷寺君から聞いたの？」

「だね」

彼も微笑む。

あたしはイワンティノ君の横に刺さって立っている槍に視線をずらして、

「イワンティノ君って、いつも朝練してる？」

「してるね。朝は五時に起きて準備して、大体七時から八時まで一人で槍投げてるよ」

あたしは素直に驚いて、

「すごい、そういうのかっこいいよね」

「がーやんも一回投げてみる？」

「ううん。邪魔すると悪いから」

と言った後で、

「……今も邪魔になったりしてない？」

「ん？ なってないよ」

そう言ってくれたものの、あんまり時間を取ってしまうのも気がひける。だから早く話すべきことを話さないといけないと思うけれど、ここであたしはなにを言えばいいのだろう？

「……ねえ、イワンティノ君はさ、」

「うん？」

純朴な顔に少し尻込みしつつ、

「あたし、昨日ね？ 雰囲気だけで先生とキスしちゃったんだ」

言い切ったあたしは、イワンティノ君の目を見つめて、

「それってどう思う？」

思い切って訊いた。

本当は未遂で終わっているけれど、したと言ったほうがあたしの訊きたいことに近いと思った。あたしはそういうことが許せなくて悩んでいるけれど、イワンティノ君なら、一体どんな考え方をするのか。それに、イワンティノ君が「そんな人は嫌い」と言うのなら、あたしの気持ちに決着だつてつく。

——嫌い、と言われることを意識してしまつて体が強張つてしまっている、

「んー……」

考えるイワンティノ君。

その間に、あたしは彼が言う台詞をシュミレートしてしまう。だけど彼が言ったのは、そのどれとも違っていた。

「あ、でも逆に俺はキス出来なくて彼女にフラれたよ」

「へ？」

「がーやんはキスしたの後悔してる？」

訊かれたあたしは、斜めに視線を外して、

「それは、うん……」

「俺は逆にしなかったわけだけど、へこんだなあ」

あくまで快活に言うイワンティノ君に、

「なんでそれをあたしに？」

すると彼は、

「がーやんも秘密を言ったから、なんとなく俺も言わないといけな
い気がする……」

あたしは思わず笑ってしまう。

「そんなことしないでいいのに」

なんでそうなるんだろうと思いつつ、でも気持ちよくあたしは言
った。

「いや、俺さ、手出さなすぎて先輩から呆れられたっていうか、夏
休みの間にキスすら出来なかったのが……」

「今も先輩とは連絡してる？」

「それが一切なくて、もう別の彼氏がいるんだと思う……」

こっぴどい風に話をしていて、あたしはつくづくイワンティノ君
は純情だなと感じた。あたしは今まで悩んでいたはずなのに、それ
が嘘なくらい心が安らいでしまう。

——イワンティノ君は、いつも変わらずイワンティノ君なの
だ。

「ま。若気の至りってやつだろうね」

「えっ？」

「俺もがーやんも。そんなこともあるって」

……イワンティノー君が何気なく口にした言葉で、呆気なくあたしの悩みは解決してしまった。

「……若気の至り、か」

あたしは彼の言葉を繰り返す。

もしかしたらあたしも、ゆつこと思い出話をするときなんかに、笑ってそう言えいいのかもしれない。——あれは若気の至りだったね、と。

——多分、きっとそうなのだ。

自分の未熟さを理由にしてしまうのは嫌だけど、それでもあたし達はやっぱり不安定で、未熟で、後になって後悔することばかりだ。

だけど、自分の間違いを許せなかったあたしはまだまだ子供で、若気の至りなんて、本当にその通りでしかない。あたしが悩んでいたことは、将来笑い話で済むようなものでしかなかったのだ。

——ひょっとしたら、あたしはイワンティノー君に嫌われてしまうことが怖かったただけなのかもしれない。

(……そっか)

あたしが複雑に考えていたことは、全部単純で、明白なことだったのだ。

「——まあ、あたし実は先生とキスなんてしてないけど」

笑顔であたしが言っていると、

「え？　じゃあ俺がぶっちゃけただけ？　うわーやられたっ。そういうことか！」

一本取られたとばかりにリアクションするイワンティノー君に、

「ね、あたし、ここで練習見といていい？」

「ん？　いいよ。めっちゃ照れるけど」

やっぱりイワンティノー君はかっこいい。

あたしはそう思いながら、

「そっいえばイワンティノー君って、今彼女いないんだっけ？」

「絶賛失恋中。ある意味俺も若すぎた……」

そう言って肩を落とすイワンティノ君に――。

「……良かったら、また観覧車でもどう？」

……あたしは、可愛らしく言ってみたのだった。

了。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0552z/>

八ヶ代あやねの幸福論

2011年12月2日20時41分発行